The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 戦後中国自由主義知識人の民主思想（1945-1949）――自由と平等のはざまで |
| Author(s) | 林, 礼釗 |
| Citation | 大阪大学, 2019, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/72440 |
| rights | |
| Note | やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

# 論　文　内　容　の　要　旨

| 氏　名　（　林　礼釗　） | |
|---|---|
| 論文題名 | 戦後中国自由主義知識人の民主思想（1945-1949）――自由と平等のはざまで |

論文内容の要旨

本稿は、戦後中国（1945-1949）の政治過程を追いながら、戦後中国の公共言論空間の実態を復元し、そこにおける自由主義知識人ネットワークを考察した上で、『観察』『周論』『新路』などの公共論壇において、知識人らが引き起こした民主論争を素材に、民主をめぐる彼らの思想的な営みに光をあて、「民主」の中身を明らかにし、戦後中国の自由主義と民主思想を再考したものである。

序章では、まず自由・民主をめぐる問題は、近現代中国を理解する上で極めて重要な検討課題であるとし、戦後中国の民主思想を探求する作業は、現代中国の「民主」の在り方、そして今後の中国の民主化の行方を構想する上で大きな意義を有すると指摘した。そして、先行研究を踏まえながら、戦後中国の言論空間に存在している数々の言説を最大公約数的に集約し、本稿の核心的概念である「自由主義知識人」を、「個の尊厳に基礎を置く自由と平等を実現しようとし、独立、寛容、理性の精神を持つ者」として定義づけた。

第一章では、戦後中国の民主憲政運動の高揚とそれによって拡大しつつある言論空間の実態を復元した。清末から1940年代にかけて、中国の自由主義は登場、発展、変容の歴史を経験し、戦後中国において民主憲政の実現が最も期待されていた。国民政府は国際的自由主義潮流と連動する形で、抗戦末期から言論の自由化に向けて主体的に取り組んでいたが、国共内戦の勃発により、次第に言論統制の再強化へと乗り出していった。一方、言論空間の拡大に伴って、各地で新聞・雑誌が創刊・発行され、知識人らは公共論壇を通して、痛烈な政府批判と憲政批判を展開していった。

第二章では、『観察』『周論』『新路』3誌の創刊の経緯、立場や理念を整理し、各誌に結集している主要な知識人を概観した上で、それぞれの知識人ネットワークを分析・比較し、その交錯状況を明らかにした。精神面からいえば、民主は「政治民主」と「経済民主」の調和を意味する、という理解については3誌に共有されていた。また、ネットワークについていえば、『観察』グループは主に儲安平の個人的交友関係をもとに、「メディア」を紐帯として形成されたネットワークであるのに対し、『周論』と『新路』は「学校」の教員を中心に結集されたもので、その背景には「結社」の要素も存在していた。

第三章では、公共論壇において知識人らが引き起こした民主論争を素材に、「自由」と「平等」をキーワードとし、両者の緊張関係に対する彼らの思想的な営みに光をあて、「政治民主」と「経済民主」を内包する民主思想を改めて検討した。とりわけ、先行研究で看過されてきた「経済民主」の中身を重点的に分析し、それは単なる「経済的平等」を意味しないことを明らかにした。

第四章では、1949年革命にあたって、知識人らは最終的に「一枚の投票用紙」と「一杯の飯」という形で民主論争を展開し、いかに自由と平等のはざまでそれぞれの政治選択を行ったかを分析し、あわせて1949年以降の大陸、台湾、香港における自由主義を概観した。中国の自由主義思想潮流は、1949年以前も、1949年以降も大陸、台湾、香港において存続しており、50年代に厳しく弾圧され（反右派闘争、雷震事件）伏流するまで、言論の自由への重視など共通した様相を呈していた。

終章では、戦後中国の知識人らが構想した民主の特徴をまとめた上で、「救亡が啓蒙を圧倒した」という命題への批判として、「愛国と民主」の問題を取り上げ、また、「多数者の専制」に対して、言論の自由の問題を提起し、さらに「自由と平等」の緊張関係として、戦後日本をも視野に入れ、現代中国のリベラル派と新左派の対立に言及し、民主にかかわる諸課題を提示した。

様式７

# 論文審査の結果の要旨及び担当者

| 氏　名　（　林　礼　釗　） | | |
|---|---|---|
| 論文審査担当者 | （職） | 氏　名 |
| | 主 査　教 授 | 田 中　仁 |
| | 副 査　教 授 | 竹 中　浩 |
| | 副 査　准教授 | 高 橋 慶 吉 |

## 論文審査の結果の要旨

本博士論文「戦後中国自由主義知識人の民主思想（1945-1949）――自由と平等のはざまで」は，序章および終章をふくむ６つの章から構成されている。それは，(1)戦後中国の政治過程を追いながら当該時期の公共空間の実態を復元し，そこにおける自由主義知識人ネットワークを考察したうえで，(2)雑誌『観察』『周論』『新路』などの公共論壇において知識人らが引き起こした民主論争を素材に，民主をめぐる彼らの議論に光をあてることによってそこでの「民主」の内実を明らかにし，(3)戦後中国の自由主義と民主思想を再考する。

申請者は，日中戦争終結から人民共和国成立にいたる時期が，(1)「新中国」の国づくりや民主・憲政をめぐる議論が活発に展開され，(2)清末以来の民主憲政運動の到達点と評価される「中華民国憲法」が制定され，また(3)「新中国」の国づくりや民主・憲政をめぐる議論が活発に展開された時期であり，かつ(4)今日の中国の民主や経済に関わる議論が先駆的に論じられていたとして注目した。

本稿では，当該時期中国の自由主義・自由主義知識人に関するこれまでの研究について，(1)「権力の中心との距離」と行動様式に基づくアプローチ（胡偉希，陳儀深），(2)世代論と社会民主主義（許紀霖），(3)個々の知識人についての研究，(4)グループ=ネットワーク（章清），(5)中国自由主義思潮の定置（水羽信男），(6)憲政から見た近現代中国（中村元哉）と概括する。そのうえで，「権力の中心との距離」と行動様式に基づくアプローチは知識人の「思想的傾向」についての分析を欠いている，個々の人物の思想に限定した研究によっては中国自由主義思想の全体像を理解することは困難であるとして，これまで個別に論じられてきた「戦後中国の政治過程」（政治史），「知識人の自由思想・民主思想」（思想史），「知識人ネットワーク」（知識人研究）を関連づけることによって，中国の自由主義の全体像を展望するという課題設定を行った。

申請者は，「自由主義知識人（リベラリスト）」を「個の尊厳に基礎を置き，自由と平等を実現しようとし，独立・寛容・理性の精神をもつもの」と定義し，各章において，当該時期の民主憲政運動の高揚と公共原論空間の拡大（第一章），『観察』『周論』『新路』三誌とネットワーク（第二章），公共論壇における民主論争（「自由」と「平等」の緊張関係，第三章），1949 年革命とそれぞれの政治選択（大陸・台湾・香港における自由主義，第四章）を検証する。すなわち：

中国国民政府は国際的な自由主義の潮流と連動して言論の自由化に取り組んでいたが，内戦勃発により言論統制の強化にシフトした。にもかかわらず，戦後の思想文化界にはさまざまな思潮が生まれ，民主・自由・憲政をめぐる論争が活発に展開された。各地で新聞・雑誌が創刊・発行されたが，そのなかで最も代表的な公共論壇が『観察』『周論』『新路』であった。（第一章）

『観察』グループは，儲安平の個人的交友関係を中心に『観察』というメディアを紐帯として形成された。これに対して『周論』『新路』グループは北京大学・清華大学の教員が中心となり，くわえて「結社」的要素（独立時論社と中国社会経済研究会）も存在していた。この三誌における政府批判や憲政批判が示すように，戦後中国の言論空間においてリベラリズムの思想や価値観は広く共有され，知識人たちには同時に複数の論壇に寄稿し言論活動を展開しうる状況が存在していた。（第二章）

戦後中国に相応しいありかたについて，知識人たちは，「政治民主」と「経済民主」の実現を訴えていた。それは

すなわち，個人の自由・権利の保障や，独裁にかわる民主的な制度の樹立という政治面での民主主義と，経済的平等・職業選択の自由・格差の是正・「福祉社会」の実現といった経済面での民主主義を平和的な変革によって実現しようとする考え方であり，「政治民主」は自由主義によって代表され，「経済民主」は社会主義（広義の社会主義）によって代表されるという民主観であった。この民主には自由主義と社会主義の調和的達成という理想的な民主像が埋め込まれていた。（第三章）

1949 年 10 月内戦に勝利した共産党は人民共和国を樹立，同年 12 月国民党率いる蔣介石は台湾に逃れた。知識人たちは「共産党か国民党か」という政治選択に迫られたが，羅隆基や儲安平や多くの知識人は大陸にとどまることを選択したのに対して，胡適派グループの主要人物は台湾へと逃れ，さらに国民党も共産党も支持できないものは香港あるいは海外に行くことを選択した。こうして中国の自由主義は，共産党にも親和的で理性的寛容さをもちあわせた容共リベラリズムとは別に，共産党のイデオロギーを徹底的に批判することで自らの理性と寛容さを主張する反共リベラリズムも増長させた。（第四章）

「終章」には「戦後中国における民主」「愛国と民主」「民主と自由」「自由と平等」の各節を配し，本論文が企図した戦後中国における民主思想の通時的・共時的位相を簡潔に論じる。

以上のように，本論文は，戦後中国の民主思想に関わる関連資料を渉猟し，先行研究を丁寧に整理することによって有意な課題設定をおこない，加えて『観察』『周論』『新路』誌を丹念に読み解くことによって堅実な分析と立論を行っている。これら諸点に鑑み，論文審査担当者は，全員一致で博士の学位を授与するに相応しいと判断した。

なお審査にあたって，チェックツールを用いて剽窃のないことを確認した。